慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヴェアナ・ スターク著 杉山忠平, 杉田泰一訳 宗教社会学
Sub Title	Stark, Warner 'Grundriss der Religionssoziologie' 1974
Author	早川, 徹
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1979
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.72, No.6 (1979. 12) ,p.879(187)- 884(192)
JaLC DOI	10.14991/001.19791201-0187
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19791201-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

労働運動が労働者政党活動に果たした役割は無視しえないものがあり，恐らくかかる炭鉱組合運動の政治領域での発展が経済領域のそれと相補の関係にあったがゆえに，炭鉱国管，国有化問題など戦時戦後のイギリス労資関係の危機の頂点に炭鉱運動が位置したとするならば，本書の実証分析における MFGB の法律制定機能の軽視が，上述の本書の政治史考察の欠如を招くこととなったのではないか。

②同様の点は，議会活動を通じての国有化要求に関しても言えることであり，本書では国有化問題は戦後の国有化闘争にのみ分析が限定され，それ以前の長い国有化要求の過程や組合政策におけるその位置付けの変化等に明確さを欠くが[4]，MFGBの政策・運動の発展・特徴を知る上で，この点の解明も必要なのではないか。

③本書は，MFGB の統一闘争及び組織の発展における大衆的戦闘性の役割を強調しているが，何故又いかなる基盤に基づいてかかる戦闘性が不断に生まれるのかという点については，社会主義等意識的・政治的運動の役割が強調されはするものの，上述のように政治的考察が不十分なために，具体的に明らかでないし，とりわけ意識的・政治的運動の役割が重要性を増す20世紀以降の，MFGB 成立以降の地方組合レベルの分析が欠如していることは，この問題に対する重大な難点であるように思われる。本書は MFGB 成立に到るまでの組合運動の地方分散性と統一の困難を具体的に詳述し，MFGB 自身「いちじるしく連合的分散的であった」(163頁) 旨指摘しているが，にもかかわらず MFGB 成立以後地方組合レベルの分析が極めて稀薄であるのは，上述の企業レベルの分析の欠如とあいまって下部大衆の戦闘性を不明確たらしめることとなっているのではないか。

以上，著者に比肩しえぬ浅学の筆者が曲解を恐れず批判的な点を種々述べたのは，紙数の制約とそれにも増して問題の提起による本書の一読の勧め，本書が一石を投じた研究の一層の進展を望むからに他ならない。

本書が，戦前のイギリス炭鉱組合運動の理論と歴史に関する最も包括的で体系的な研究であることを記して，容赦を乞いたい。

(1978年，未来社，417頁，5000円)

海　野　恵　美　子

(慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程)

注(4)　炭鉱国有化要求の発展については，(注3)の栗田健近著や E. Eldon Barry, "Nationalisation in British Politics,,1965, が詳しい。

ヴェアナ・スターク著
杉山忠平，杉田泰一訳

『宗教社会学』

(1)

著者の Werner Stark は，1905年にマリエンバードに生まれ，プラハ，ハンブルグ，ジュネーブの各大学並びにロンドンスクールオブエコノミックスに学び，プラハ，ケンブリッジ，エジンバラ，マンチェスターの各大学で教鞭をとり，フォーダム大学社会学教授を経て現在ザルツブルク大学名誉教授の地位にある。主要な著作としては，The Ideal Foundations of Economic Thought/1943, The History of Economics in its relation to Social development/1944, America: Ideal & Reality/1947, The Sociology of Knowledge: An Essay in Aid of a deeper Understanding of the History of Ideas/1958, The Fundamental Forms of Social Thought/1962, その他があげられる。みられるように社会思想史・経済思想史にわたる広範な研究によって特色づけられ，いずれも高い評価を受けている。

ここに紹介する『宗教社会学』は，独文による 'Grundriß der Religionssoziologie' 1974, の全訳であるが，同書は同じ著者の英文による，'The Sociology of religion—A Study of Christendom—' vol. 5 (1966-72) の著者自身による要約である。要約であるため，英語版にみられる該博な知識に裏づけられた叙述の興味深さはそこなわれているが，逆に著者の意図や思考方法の特質は，それだけ明確になっているものと信じられる。以下まず本書の概要を略述し，ついで本書の意義と問題点に触れることとする。

(2)

本書は二部五章から成り，前半三章は広く宗教共同体の外的な姿を捉えるmacrosociology of religionとして位置づけられている。ここでは三つの類型をとおして宗教組織が論じられる。まず第一に宗教組織がそれを包括する社会と極めて近しい関係に立つか，或い

は完全に一致してしまう場合，これを Religious establishments (established religion) と呼ぶ。国家宗教と訳されている。国家宗教は，聖なる国王 (sacred ruler)，聖なる民族(sacred nation)，聖なる使命(sacred mission) という三つの制度乃至理念に示される。人間の世界が現実全体の中に損われることなく，調和のとれた形で横たわっているという確信は，安全感と安定感を生みだし，こうした感情は社会生活の円滑化を促すが，この場合，宇宙の秩序の中心が人間社会の中心となり，その結節点に王権が位置する時に聖なる支配者，太陽王崇拝が生じるとする。こうした太陽王崇拝の中にキリスト教が融合した例としてビザンティン，フランスに於けるガリカニズム，イギリスのアングリカニズム，ロシアの事例が引き合いに出され，国王塗油の聖餐式的性格，国王による奇蹟的治癒の事例などが述べられる。宗教組織の第二の類型としての宗派 sect) は，何よりも国家宗教の対立物として把握される。伝統的なカソリック諸国よりもイングランド，ロシアに於てはるかに多くこの類型が認められることが述べられ，その起源，性格，さらにはその凋落までが述べられる。簡単に要約すれば次のようになる。中世末期にカソリック教会と封建制度の関係が密になりつつあった時にまず宗派の萌芽が認められる(職工の異端)。やがて教会と国家の結合がはっきりした時に宗派もはっきりとした形姿を整える。クウェイカーにせよ，メソジストにせよ，さらに下って救世軍，エホバの証人等々，当初は，いずれも経済的には最下層を構成する人々によって担われた。この点こそ宗派現象の重要な社会的要因と考えられる。国家宗教が国王を神格化するのに対して，宗派の成員は自らを神化した人間とみなし，内部には徹底した民主制と反権威主義的集会主義が貫く。しかし宗派は，急進派がその形成途上で暴力的に根絶されたり，退去移住によって社会との闘争を終焉させるか社会に順応するかの形で凋落してゆく。何よりも構成員を宗派へと導いた諸条件，経済的条件や劣等意識が宗教的確信をとおして克服されることが凋落の要因である。諸宗派はデノミネーションとして社会に逆戻りする事になるのである。

宗教組織の第三の類型は——そしてこの類型こそ著者が力を込めて提出するキリスト教の本来的な姿なのであるが——普遍教会 (Universal Church) である。カソリシズムの理念と制度，又初期カルヴィニズムにこの類型が体現されていると考えられている。今まで挙げてきた二つの類型が国民的社会，階級的社会にそれぞれ宗教が接近しており，従って又包括的な枠社会に対する受容と拒絶の二つの契機から構成されるのに対して，この最後の類型はいずれにも属さない。普遍教会は，国家権力に対する無関心，国家権力は結局は生のはかない実利機関にすぎず，真の宗教的意義は国家には属さないという態度に示される。カソリックのイタリアで，カルヴィニズムのスコットランドで教会組織は「自由な国家に於ける自由な教会」を以って自認した。ローマカソリックの中世に於ける状態を見るならば，世俗社会が身分によって分かたれていた時でもハドリアヌス四世のように聖職者内部では，昇進は自由であった。まさしく「富者の教会でも貧者の教会でもない」(J. Wach)と言うのである。この点では初期のカルヴィニズムも全く同様であった。なぜなら神と人間の決定的断絶の教説にあっては，天上への選択は誰ひとりとして知ることができない。その限りでは救いの可能性は，万人に平等に与えられているからである。

こうして著者は，普遍教会の諸側面とりわけ国家・王権に対してどのような仕方で自らの普遍性を保ち得たのかを検討する。まず政治原理に関しては，国家宗教が君主主義を，宗派が民主主義を原理とするのに対して普遍教会のそれは，王位にあるものと祭儀を司るものとを全く同等に対置する両頭制であると指摘し，中世を一貫してゲラシウス一世の定式が保持されたこと，普遍教会の思想家や代弁者，とりわけトマス・アクィナスが皇帝教皇主義からあらゆる神学的基盤をとりさる理論を展開したこと，またグレゴリウス七世が国王の地位を神の任命としてではなく，雇用契約に基づくとしたこと，さらに法制的な争点としての戴冠式の解釈に於ても教会法学者は，それをサクラメントのリストから除外したことなどが述べられる。やや時代を下りスペインカソリシズムの問題，コンキスタドーレスの所業に関する著者の意見は，始め悪く終わりが良かったという点にある。何故なら中南米では「結婚」を通じて異人種の融合が起きたからであり，この点で始め良く終わりの悪かったアングロサクソン世界の世界進出とりわけマサチューセッツの事例と対比される。そしてこの点でカルヴィニズムの内部的崩壊が認められる。カルヴィニズムが普遍主義を失った要因は，その担い手がブルジョワジーであったという経済的要因とともに，神と人間の断絶を強調し恩寵の普遍性を説いた教説が，いつしか部内者を選民とする宗派的イデオロギーとなっていった点にある。

ところで普遍教会は，常に自らの普遍性を喪失して国家宗教へと転換する危険がつきまとっていた。こうした危機を最後の地点で救う動き，教会の革命的要素として修道会を挙げることができる。国家教会から革命的諸力の離脱は宗派運動の形姿をとる。これに対して普遍教会のもとで，修道会は自己の歴史的使命すなわち信仰を内部から刷新し普遍主義を貫くにあたって十分な力を蓄積するまで組織の一隅に留まることができる。こうして離反と復帰という二局面の運動が認められる。はるかに時代を下って，受難会，救世主会の二つの修道会は，啓蒙絶対主義の合理主義的傾向に対抗して大衆をひきつけたが，その内容はメソジスト主義と酷似していた。ここでもメソジストがアングリカンを離れたのに対して両修道会は組織内に残り，やがてその後継者が教皇となったのである。イエズス会の事例は宗教改革との関係で特殊なものとみなされるが，本書によればイグナティウスーロヨラの人格はルターとカルヴァンの二人の人格を統合したものだったとされている。修道士会は当初から隠修士の方向と共住修道士的方向を含んでいたが，異なる諸要素を含みこむところにカソリシズムの特質があったことが最後に強調され，第一部の叙述が終わる。

第二部は，著者の言う Microsociology of religion に属すべき問題，宗教共同体を構成する基礎的な人間類型と役割を記述することにあてられた第四章と，Community（共同社会）と Society（連合社会）（=Gemeinschaft u. Gesellschaft）という対比を特殊な文化体系を促進する土壌として受けとめ，知識社会学的観点から宗教文化を考察する第五章とから成る。

第四章では，集団的カリスマ観という問題が提起され，カリスマ的呼びかけにはカリスマ的応答が対応し，神秘的な共同体形成力を成員全体の問題として理解する。このことがまずイエスと使徒たちについて述べられ，ペテロ，ヤコブ，パウロら二世にもカリスマを認めるべきだと主張する。イエスの死後にもイエスの生命の存続が神学的に認められ，しかも秘蹟をとおして実在が確認されるのであり，教会がキリストの身体として実存するごとくイエスは永続的な実在である。これによりヴェーバーのカリスマの「日常化」概念に，さらにヴェーバーが依拠したゾームに反論する。ヴェーバーとゾームはかつて存在した歴史的イエスと最後に到来する終末論的キリストの二局面しか念頭に置かないために現存するイエスという宗教的現実を看過した，というのである。また聖者と祭司の役割に注目するならば，両者は真正カリスマと公的カリスマの対比としてではなく個人的カリスマと集団カリスマの対比として把えられるべきであるとされる。ところで教会組織が大きくなれば専門の職員が生じるがカソリシズムは教団の聖化しか知らない指導層を集中的教育を通じて作り出す。一方プロテスタントは説教師を教区信徒によって選出させる。ここでは両者の共同社会的性格と連合社会的性格の対比が重視されよう。カソリックの祭司は秘蹟の執行，信仰財の継受，懲戒権によって特色づけられるが，有機体論的な思考によれば彼は主の道具として恩寵行為の媒介因にすぎず，第一因はキリストにある。同じことは教皇にもあてはまる。教皇は教義を作り出すのではなく単に言いあらわすにすぎない。教皇の不可謬性は教会とその創設者との一体によって基礎づけられていることが述べられる（第四章）。

こうして，氏族のであれ家のそれであれ集団の連帯性が自明のものとして存在していた社会に於てカトリシズムは適合的な存在であった。カソリック的キリスト教の集団的な意識下の構造が象徴主義的サクラメント的上部構造へと導き，両者をあわせたものがキリスト教の生活実在を作った。そしてカソリック的象徴主義がパリ，フィレンツェ，マドリッド，ミュンヒェン，ヴィーンの芸術世界を可能にしたのである。これに対して感覚も象徴をも敵視するカルヴィニズムは何ら芸術を促進しなかった。レンブラント，J. S. バッハの芸術はむしろプラトン流の芸術理論との密接な関係から解釈さるべきである。それではこうした宗教世界を可能にした共同社会の伝統が途断える時何が起こるのだろうか。宗教の「世俗化」という概念はここでは拒否され，本質意志（cf. Tönnies）への回帰と合理的一元論の廃棄，世界の再神話化がわずかに語られながら小著が閉じられる。以上が本書の概略である。

（3）

次に本書の特質を述べる。略述した内容からも了解されるように，本書はキリスト教社会を真芯にすえて記述するきわめて規模の大きいものであり，タイポロジックな方法と，それを導いた著者の意図をとおしてキリスト教社会を担った諸集団の特質が文化的伝統を異にするものにとっても明快に示される点で，大きな意義を持つことがまず指摘できる。このことは，とり

わけ五巻から成る英語版に認められるべきであるが，ヨーロッパの宗教や歴史に関心を持つものにはきわめて示唆的な引用を行間に認めることさえできるのである。

また旧著『知識社会学』で，著者はキリスト教社会を彼独自の社会学的二分法で示してみせた。次の表がそれである。

カソリシズム	カルヴィニズム
有機的世界観への傾向	原子論的世界観への傾向
実在論	名目論
個人に先だつものとしての社会	個人に続くものとして想定される社会
全真理の担い手としての共同体	全真理の担い手としての個人
象徴主義，芸術的創造性	写実主義，現実性
主情主義・神秘主義	合理主義
真理への道としての隠棲的冥想	真理への道としての世界内観察
Tönnies の共同社会 (Gemeinschaft) に適合的	連合社会 (Gesellschaft) に適合的

こうした二分法が全体の叙述を貫いている点が本書の今ひとつの特質である。中世から近代への歴史の流れは共同社会的性格から連合社会的性格への移行を示しているが，著者は両者を再び転換可能なものとして位置づけている。以上述べた本書の特質は宗教を扱うにあたっての著者独自の問題設定の仕方と著者のとる立場によってさらにきわだたせられている。著者は序文の中でデュルケームとヴェーバーの宗教社会学に触れ，デュルケームの議論にあっては宗教が社会に還元されてしまうこと，ヴェーバーが方法的個人主義の立場をとることを批判するとともに，両者が個人的には非宗教的であったことを問題としてとりあげる。すなわち「宗教社会学の課題は還元主義に向かう既存の傾向——つまり宗教現象を解消しようとする傾向——を克服することにあるだけでなく，集団的側面をも個別的側面をもともに公正に取扱う理論を生みだすことにある。」（序文）こうした著者の理論的課題は，キリスト教世界を対象にすえることで最もよく果たされることになる。というのは，キリスト教が他の領域に還元しえない独自の思想的結晶化に達しており，しかも実在形成力を備えていると認められることによる。キリスト教の理念はイエス・キリストの受肉の事実から出発して，それを教会制度の中に体現した時に歴史的時間の中に古代の祖型と反復にもとづく神話的コスモスを再生させることに成功した。かくして教会は聖化された共同体である。それ故にその内部にあって個人は集団に解消され，デュルケームの未開社会研究が前提としていた宗教的一致点を持った集団としての姿をあらわす。しかしキリスト教は実在形成力である限り，表象はすでに形成されている実在を表現するにすぎないとするデュルケームは退けられ，むしろヴェーバーがカリスマに期待したところのものを，キリスト教会とその理念全体に負わせることになる。ヴェーバーにあっては神の恩寵に浴する個人が問題であり，ここでは神の恩寵のもとの教会組織全体が問題なのである。「教会とはキリストの身体の現存である」この神学説を受け入れない点でヴェーバーは拒否される（第四章）。それ故，著者の理論上の問題設定の真意は実はかような神学説の象徴的表現を理解し受け入れる立場からの社会学の提起という点にあったことが明らかとなる。要するにデュルケームとヴェーバーが「個人的には非宗教的」であることが何よりの問題だったのである。それ故，個人的に宗教的であることが特定の宗教の象徴的表現を理解することにつながる時に，意義ある宗教社会学説の形成に寄与するという問題意識が著者の出発点である。著者がこうした立場をとる故に，タイポロジー，とりわけ第三の類型である普遍教会の意義を強調する議論が生命を与えられることになった点は特筆されなければならない。

以上述べきたった特質をとおして本書の意義が認められるが，同時に，一定の限界乃至若干の問題もまた上述の著者の視角から結果されざるを得ない。以下，この点を述べる。

まず前半の類型論に関しては宗教組織類型論の学説史をすこしく辿り，問題点発見の一助としたい。周知のようにトレルチ（Ernst Troeltsch）は，キリスト教の文化史的意義と将来の発展可能性をかけてキリスト教の理想及び価値観と既成の社会制度との関係を社会学的に考察した。教会と社会の関係は妥協と拒否の二つの契機から成り，組織論としての「教会」と「セクト」という類型が成立する。トレルチは，これに「神秘主義」を加えたが，とりわけ前二者の対抗関係が後に多くの検討を加えられて，教会組織類型論として展開してゆく基礎となったのである。トレルチの業績は現在的な地点からは次のように言うことができよう。

すなわち，キリスト教圏という特定の文化体系に於ける社会関係のパターンとしての諸教派を，その文化体系の構造の中に，それぞれの機能に従って位置づけてみる企てを行うとともに，それぞれが相関する勢力関係の移行から社会変動の方向を眺めようとするものであり，キリスト教思潮の中の神学の位置づけをする知識社会学的業績である，と（『宗教学辞典』柳川啓一稿p. 541)。同時にキリスト教文化圏という特定の文化圏を価値と意味を感じうる対象として設定したその仕方のうちに，彼の知的営易の主題が認められる点が，まず重視されなければならない。トレルチにとって「キリスト教は運命によって与えられた啓示であった」し，西欧の文化の理想は「運命が指示した絶対的なものの表現であった」（『歴史主義から社会学へ』C. アントーニ，pp. 109-110)。しかるに宗教組織類型論の以後の展開は，こうしたトレルチ的問題設定を越えて，他の文化圏に於ける妥当性を考慮に入れる地点で示されることになった。まず第一に，教会類型論はキリスト教を前提としない他の文化圏に適用することはできないし，西洋人がこの類型を例えばヒンズー教や仏教にあてはめようとしても，自らの持っている宗教組織に関する観念をうつしかえるだけに終わってしまう。こうした見地にたって全く異なる地平から宗教集団の類型を考察する立場が生じてくる。例えば，合致的宗教集団と特殊的宗教集団乃至創唱集団なる類型化がこうした点から論じられている。その一方で，トレルチの教会類型論が本来はらんでいた普遍的契機に注目して，それを生かしながら単なるキリスト教会の類型に終わらせず，宗教制度・集団一般に教会類型論を適用してゆこうとする努力も行われている(J. M. Yinger, J. Wach)。

こうした二つの動きは，学問の世界が自らの視圏を拡めていった当然の結果であり，類型定立という方法によってキリスト教以外の諸宗教をも同様に，普遍的な水準のもとに意義と意味がはかられ探求される規準が成立しつつあることは，学問の発展に意義ありしかも正当なことと判断される。

しかるに本書は，読者をして再び視野をキリスト教世界に限定させることになった。この限定は，前述の著者独自の立場と方法にもとづくものとみられるが，類型論の今日的展開をふまえるならば，こうした視野の限定によって生じるであろう「限界」がどのように意識されるかが，本書の立論の方向を決定するように思われる。そこで，今いちど本文の叙述に就いてみるならば，第一部に示された三類型は，キリスト教世界をもとに形成されたものであるにもかかわらず，著者は国家宗教の見本として神道をしばしば引合いに出していることに気付く。ここには記述の上での逸脱があり，そしてこれは以外に大きな類型構成上の難点を示しているように思われる。著者の言う国家宗教の類型は，キリスト教をとりこんだ国家宗教（本書に記されたビザンティン，フランス，イギリス，ロシアの例）と神道のようにキリスト教とは本来無縁のものとの区別が欠けている。この点に気付くならば，さらに前キリスト教的信仰素地の存続，原始的異教的住民の存在が，そのままストレートに国家宗教に連結されていることにも気付くことになる。もとより文化的伝統を異にするものを単にキリスト教の理念との対比で前代的なものと把握してしまうのである。強固な国家観念はキリスト教のもとでも異教のもとでもひとしく生じるのであって，異教と国家との結合，キリスト教と国家との結合は，そのそれぞれの局面のひとつにすぎないのではないか。著者は普遍教会の普遍的意義を確認するために，教会が国家と結ぶ局面を否定するのをすこしく急ぎすぎたと考えられる。以上の点で，本書に示された三類型はキリスト教世界に関しては一定の妥当性を持つとしても，異なる社会への適用については相当の慎重さが要求されることを指摘しておかねばなるまい。

その他にも，普遍教会の意義を強調しようとするが故に生じるほとんど護教的な論旨に注意することが肝要である。たとえば普通教会の叙述にあってはカソリシズムがそれ自身として抱えていたマイナス面の叙述がほとんど無い。ほんの一例として中世前期グレゴリウス改革以前に，聖職売買，聖職者妻帯が日常の常識となり，ゲルマン的制度の影響の少ない地中海全域にも私有教会制度が拡がっていった事態に関する記述が全く抜け落ちてしまうことを挙げることもできよう。類型定立的叙述をとおして読者は普遍教会の意義を再認識するとしても，教会制度の腐敗の局面を過小評価することになりかねない。以上が前半の部分の類型論にみられる問題点である。

史実の諸局面が類型の意義を強調するために切りすてられることは，一定程度やむをえない。しかし，類型化が過度の単純化に向かうとすれば問題である。こうした点は，第五章の宗教文化の類型論にも指摘できる。著者はカソリック的世界の統一性が分裂してゆく文化的背景として共同社会から連合社会へという図式を用意している。しかしこれは，近代的観点から類別しうるところの経済史的・政治史的・法制史的・文化

史的等々の諸領域間の関係の中から把握さるべき歴史の豊饒性をきわめて抽象的なレヴェルで統一してしまうために，宗教のもつ歴史的社会的脈絡でのダイナミックな諸関係を事例の多いわりには平板な形で開示してしまう面があると言えよう。

以上述べきたったように，本書は若干の問題点をはらんでいる。しかも，こうした問題点は本書の特質と密接に関連し，さらには著者の発想のレヴェルにまで遡りうるものであるだけに看過しえないものである。

最後に，翻訳に関して一言付け加えるならば，こうした特殊なテーマの著書には訳注が必須であるとともに，充分日本語として定着していない言葉の翻訳にはその都度原語を示すなどの配慮が必要であったと思われる。たとえば，国家宗教なる語は英語版では established religionまたは religious establishments と表記されており，訳語の語感とはおおいに異なっている。このばあい重要なタームであるだけに問題は大きい。これに類する問題が他にも本書中に散見された。訳者の一考を望みたい。

〔1979年6月，未来社，282頁〕

早川　徹
（慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程）

シンポジウム叢書　慶應義塾経済学会編				
書名	発行年月	発行所	定価	備考
経済学方法論の諸問題	'67. 9.	東洋経済新報社	800円	
日本経済の近代化	'67.12.	〃	850	
後進地域の経済開発	'68. 9.	〃	1,100	

経済学研究叢書						
	著者・訳者	書名	発行年月	発行所	定価	備考
1	高村象平	ドイツ・ハンザの研究	'59.12.	日本評論新社	470円	
2	気賀健三	ソビエト経済の研究	'60. 1.	〃	280	
3	加藤寛	ソ連の経済成長と経済計画	'60. 4.	〃	320	
4	富田重夫	正統学派、限界主義およびマルクシズムの体系的理解	'61.12.	〃	380	
5	大熊一郎	フィスカル・ポリシーの理論構造	'63. 3.	〃	400	品切
6	中村勝己	アメリカ資本主義の成立	'66. 2.	日本評論社	1,200	
7	矢内原勝	金融的従属と輸出経済 ――ガーナ経済研究――	'65.12.	〃	1,000	
8	ゴッシェン 町田義一郎訳	外国為替の理論	'68. 3.	〃	650	品切
9	スリッヘル・ファン・バート 速水融訳	西ヨーロッパ農業発達史	'69.11.	〃	3,200	品切
10	松浦保	イタリア経済分析	'70. 5.	〃	2,300	
11	尾城太郎丸	日本中小工業史論	'70. 9.	〃	1,800	
12	岡田泰男	アメリカ公有地制度史の研究	'73. 5.	陽樹社	2,800	
13	ウィリアム・ゴドウィン 白井厚訳	政治的正義(財産論)	'73. 7.	〃	2,200	